

医療ルネサンス

No.8019



乾癬

1/6

生物学的製剤で症状改善

福岡県に住むA子さん(69)は2週間に1回、福岡大病院(福岡市)に通う。皮膚の病気「乾癬」の治療薬を注射するためだ。「この薬に出会う前と後では、まるで違う人生を歩いているようです」という。

乾癬は、免疫に関わる細胞から、炎症を起こすたんぱく質「サイトカイン」が過剰に出してしまうために起こる。A子さんの場合、始まりは19歳の時。頭や背中に赤みをおびた発疹ができた。そのうち、表面は白くなり、くずになって剥がれ落ちた。乾癬で最も多い「尋常性」というタイプだった。治療はまず、炎症を抑える飲み薬や塗り薬を使う。A子さんも長年、これらの薬を使ってきた。だが、皮膚の症状はよくならず、別のタイプにもなった。発疹が広がり、全身の皮膚が赤くなる「紅皮症」や膿が詰

まった水ぶくれが出る「膿疱性」だ。

2012年に転機が訪れた。主治医の提案で「生物学的製剤」での治療を始めた。サイトカインの働きを強力に抑える効果があり、飲み薬や塗り薬で改善できない重い症状の患者向けだ。A子さんは、2種類の生物学的製剤を使った後、16

年に今の薬に変更した。これまでの2剤では、発疹が薄くなった。3種類目は、さらに高い効果が得られ、皮膚の症状はきれいに消えた。

若い頃から、服に剥がれ落ちたくずが目立たぬようにと黒い服を避けた。周囲から「フケがついているよ」と言われた時は「シャンプーを変えたばかりなの」とごまかした。くじけそうなのは「乾癬に負けてたまるか」と自分に言い聞かせ、気持ちを奮い立たせた。

今は聞いている感覚はない。発疹にも水ぶくれにも悩まされない日々を過ごしており「普段は病気のことを忘れるほど快適です」と笑顔を見せる。乾癬の患者が使える生物学的製剤は10年に登場し、12種類に増えた。治療の間隔や、抑え込むサイトカインの種類など、それぞれに特徴がある。同大皮膚科教授の今福信一さんは「生物学的製剤を使えば、重い皮膚症状を上手にコントロールできる時代になりましたが、選択肢が増えた分、一人ひとりに合う薬をどう選ぶかが重要になっていきます」と説明する。



お薬手帳や説明書類を手に 闘病を振り返るA子さん

同大が事務局を務めるNPO法人「西日本炎症性皮膚疾患研究会」は19年8月、生物学的製剤による治療を受ける患者の情報を登録するデータベースをつくった。薬の種類や症状の変化、副作用などの経過を10年間にわたり記録し、分析する。大学病院などに通う約2500人が協力する。研究を主導する今福さんは「確かな根拠を持って、最適な薬を提案できるようにデータを示したい」と話している。(このシリーズは全6回)